

戦後65年を過ぎ、戦時下の学校生活は忘れ去られようとしています。戦時中校名変更した「東洋永和」では勤労働員はどのように行われたのか、二号にわたり特集を組みます。

特集：勤労働員

「東洋永和」の勤労働員

岩原 さかえ

史料室から勤労働員の思い出を書くように言われ簡単に引きうけて二カ月も経つが速筆の私が筆を持つことにためらい、しかも心に負担を感じつつ今日ここに至ったのは、印象だけが強くははっきりした事実の確認が取れないことであった。夥しい歳月が流れ、私も今年八十九才という年になり当時の事は曖昧模糊として完全に埋没しかかっている故だ。当時の直接の上司だった長野彌先生や光明照子先生はとうの昔に亡くなられてしまったし、唯一人生き残りの同僚小林悦子先生（現姓 村井）は私より六才年長の九十五才で、専門は音楽。勤労働員中も軍の許しを得て休み時間は讃美歌を歌っていたということだけを折に触れて語られていた。

ヒミツの戦局

当時は全てがヒミツ主義で、国は常に勝っていることのみを報道し、南海で日本海軍が大敗している事などは大ヒミツであった。勤労働員で作る工作が軍の何のタシになっているか、一体何を作っているかは大ヒミツであった。汽車に乗れば、絶対に窓外の景色を見てはいけないヒミツの場所がいくつもあった。私達は新聞やラジオがひたかくしにしている僅かな裂け目から“日本は何だか怪しいな”と想像し、毎日に乏しくなる食事の間で、親しい者同志でヒソヒソと互いの不安を交換するだけであった。



千人針

私は東京女子大の国語専攻部を昭和十

六年冬卒業し、翌十七年四月鶴来文子先生の病氣療養三カ月の間だけ補充教員として就職したが、鶴来先生復職後も歴史科の補充教師をつとめ、昭和十八年四月には専任教師として新入生の担任となった。それから一年の間に、山本五十六司令長官が四月に戦死、アッツ島玉砕が五月二十九日、学徒出陣が十月二十一日、昭和十九年六月マリアナ沖海戦で大敗、それからサイパン、グアム島、テニアン、レイテ沖海戦と続くのだが、新聞もラジオも報道は統制され、ことの重大さはヒミツにしている、一般国民はまさかこの日本が焼野ヶ原になるとは夢にも思わなかった。

二年生 勤労働員開始

昭和十九年秋、政府は永和の二年生にも勉強をやめて御国の為に働けと言ってきた。嫌いな勉強をやめて大威張りして御国の為に働けるとは嬉しい極み、政府指定の国民服を着た少女達は支給された日の丸の鉢巻をして、決起大会の式に参列した。この大事な日がいつだったかは記憶にない。^(注) 決起の式は多分文部省からの命令によるものだろう。私は二年生担任の国語教師として“宣誓文”を起草し、大いに緊張感溢れる文語体に仕上げ、初等科から進級した高山京子さんに総代として読ませた。勉強ができ物腰の上品な彼女が甘ったるい声で宣誓文をよみ上げ、芝居がかった“職場前進”式に、私は満足した。席のうしろには、高山京子さんのお母さんが上等の和服を上下お揃いに仕立てたモンペ姿でしとやかに坐り、「大事なお役目ですので見届けに参りました」と挨拶された。その頃の私達の気分は、その中神風が吹いて、なんとかなるさといったゆとりがまだあったらしい。

徴用された女達が一群となっていた。毎朝一同は宮城遥拝の後、一同声を揃えて戦陣訓（昭和16年1月8日、東條英機陸軍大臣が軍人勅諭の実践を目的に公布）の序の一部を叫ぶ。“夫れ戦陣は大命に基き皇軍の神髓を發揮し、攻むれば必ず取り、戦へば必ず勝ち、遍く皇道を宣布し、敵をして仰いで御陵威の尊嚴を感銘せしむる処なり。されば戦陣に臨む者は、深く皇国の使命を体し、堅く皇軍の道義を持し、皇国の威徳を四海に宣揚せんことを期せざるべからず”

そして最後に軍人勅諭の一部

一つ、軍人は忠節を盡すを本分とすべし

二つ、軍人は礼儀を正しくすべし

三つ、軍人は武勇を尚ぶべし

四つ、軍人は信義を重んずべし

五つ、軍人は質素を旨とすべし

を声たからかに唱和して一日の作業を開始し、私達もそれに従った。

軍人勅諭は明治15年に発令された甚だ名文の長い勅語である。明治維新から僅か十五年でこれだけの大日本帝国の思想を樹立させ軍人を教育し、結局日本を敗戦に導いた甚だ重要な証拠物件である。

召集令状書き

さて軍隊での我々の仕事は召集令状書きであったが、船戸軍曹が赤い令状の厚い名簿を持ってきても住所が焼けて宛名が判らなかつたり、本人が生死不明だつたり、たまにここを書けと言われたら友達のお父さんだつたり、隣家の小父さんだつたりした。

後方の軍人の実態

その中何も仕事がなくなり、元柳橋の有名な

料亭の若旦那だったという船戸軍曹は遊び上手な人で生徒達に“銭まわし”や“ラカンさんが揃ったら回そうじゃないか、やっこらさのさっさ”などとゲームを指導する。大尉殿は日本の運命を嘆いて机にうつ伏しているのを、船戸軍曹が“大尉殿しっかりして下さいよ。それでは士気が上がりませんよ”と肩を叩く。上田軍曹は早稲田の佛文科出で母親は有名な料理の先生とかで、“ああ食いたいなあ牛肉のバタ焼のジーンという音”などといってフライパンの牛肉の真似をして踊り上がっていて、ここも士気はたるんでいた。しかし偵察機が警報と同時にやって来ると彼らは防空壕になだれこみ、私達も一緒に入ろうとするとここは我々の為の壕だから、あっちへ行け、と入れてくれない。私はこの時程、軍人共を恨めしく思ったことはない。八月六日・九日原爆が落ちた翌朝、彼等はトラックに荷物を運び、これから奥多摩の五日市に移動するから一緒にゆきたい者は連れてゆくから家族と相談しろという。生徒達の中には家も焼け防空壕で溜まった水を汲みだしつつ暮らしている者もいたので、自分は五日市にゆくつもりだと言い出す者も出てきた。軍の防空壕から私達を追っ払った軍人達が何をしてくれるか。私は大反対だったが、五日市で生命さえ助かれれば何とかかなるか、と判断ができず、わざわざ永和にいて長野先生や光明先生の意見を聞いたが、誰からもたしかな返事はなかつた。

そして八月十五日、日本は無条件降伏をした。

(元国語科教諭 1942年～1951年在職
旧姓 比屋根)

注：作業所日誌によると、二年生入所式は1944年12月16日であった（編者）



昭和18年入学、高等女学科1年3組。後方中央に担任の岩原さかえ先生。全員もんべ着用で国民服が多く、制服の生徒の方が少ない

「東洋永和」の勤労働員 年表

当時の学院はどのような戦時体制であったのか、勤労働員を中心に、史料に基づき年表を作成した。

1937年	日中戦争始まる (青字は国内一般事項)
1938年	国家総動員法公布・施行
1939年 2月2日	御真影奉戴式
7月	学校農場開始 (高女科：花小金井)
1940年 6月	礼拝前の宮城遥拝始まる
12月	宣教師の引き揚げ帰国始まる
1941年 3月15日	校名を東洋永和女学校と改称
6月	宮城外苑勤労働奉仕、学校農場作業、明治神宮参拝、五大節、勅語奉読式が学校行事となる
7月28日	防空演習始まる
9月	報国隊の隊組織結成 (注：生徒会にあたる校友会が報国隊となった)
11月	国民勤労報国協力令公布 (未婚女子年間30日以内の勤労働奉仕義務化)
12月	太平洋戦争始まる
1942年 2月	東洋永和特設防護団結成 防火訓練始まる
6月24日	ミス・ハミルトン、交換船にて帰国
10月	高女科4年生、 小林商店 (本所厩橋。パラシュート製造工場) にて勤労働奉仕
* (時期不詳)	3・4・5年生 凸版印刷工場 (下谷。満蒙紙幣の印刷ミスチェック等)、 ライオン齒磨工場 (齒磨き粉の梱包)、 赤羽工廠 (碇子の包装)、 池貝鉄工所 、 東京地方専売局 、 葛原工業所 にて勤労働奉仕
1943年 5月	全生徒、防空服装 (もんぺ着用、防空頭巾持参) 義務化
6月	学徒戦時勤労働員体制確立要綱決定 (本土防衛のための軍事訓練と勤労働員を徹底)
9月	25歳未満の女子を勤労働挺身隊として動員
10月	出陣学徒壮行会
1944年 1月	緊急学徒勤労働員方策要綱決定 (勤労働員は年間4か月継続して行う)
3月	閣議、学徒勤労働員を通年実施と決定
4月	文部省、学校工場化実施要綱発表、女子校に学校工場化を指示
7月1日	高女科3・4・5年生と師範科生、学徒勤労働員に出勤始まる。(3・5年生 - 沖電気芝浦工場 (学校内設置) = 東洋永和作業所、4年生 - 安藤電気蒲田工場 、師範科 - 群馬県嬬恋農園)
8月	初等学校3年生以上 集団疎開 (栃木県出流山)
11月	B29東京を初爆撃、以後本土空襲激化
12月	高女科2年生も勤労働員に加わり、学校工場に出勤。それまで学校工場で働いていた3年生は 沖電気芝浦製造所 または 中央光学精機 (洗足) へ異動
1945年 3月9・10日	東京大空襲
3月	初等学校1・2年生も集団疎開に合流
4月	鳥居坂警察署、5月より陸軍東京師管区司令部が校舎の一部を使用開始。陸軍東京聯隊区司令部は宣教師館を使用
4月15日	安藤電気 全焼
5月23日	中央光学精機 全焼
5月25・26日	東京山の手大空襲
5月25日	沖電気芝浦製造所 全焼、6月中に学校工場中止となる
6月28日	陸軍(聯隊区司令部)の作業補助始まる * 事務：軍幹部候補生の名簿整理、召集令状書き (校内、麻布中学校、青山学院にて) * 実務作業：戦死兵士の名簿確認と遺品照合 (駒場の旧第一高等学校、芝の増上寺にて)
8月15日	天皇、戦争終結の詔勅放送



除草の勤労働奉仕

(史料室 酒井 ふみよ)

* 参考資料：『百年史』、『120年史』、「沖電気株式会社 東洋永和作業所日誌」、「教務日誌」、「東光」創立百周年記念 (1984)、「宮城学院資料室年報」11号ほか

「戦時下の女学校生活」第1部

下山田典子

戦中派という言葉があるが、私達はまさにその言葉通りに5年間の女学生時代を過ごした。私達が女学校に入学する昭和15年から戦時体制になり、入学試験は筆記試験が廃止され、口答試験と体力テスト、身体検査だけが行われた。

ミス・ハミルトンの思い出

ミス・ハミルトンは永く校長をなさった方らしい威厳とやさしさのこもった茶色の目を持った先生として、金曜日の礼拝、日曜礼拝でお話を伺うほかは直接教えて頂いたことがないが、別科から編入された人達が、英語の時間になると図書室で先生を囲んで勉強している様子を見る事があった。そのうち幼稚園の後の御部屋に軟禁されてしまわれた。すぐ近くなのに、学校にもいらっしゃれずさぞ淋しく御不自由だったとおもう。或日、母が庭で作ったレタスと二十日大根を姉と2人でお届けに行ったら、とても喜んで下さった。やがて御帰国という時、学校でお別れの礼拝をしたあと、鳥居坂の通りに全校生徒が並んでお見送りをした。が、後に聞くところに依ると、当局から、敵国の人だから裏口からそっと出るようにと通達があったそうだが、先生方が一番の功労者でいらっしゃる先生に対してそんな失礼なことは出来ない、と強く申し入れて、やっと前述のようなお見送りをする許可が下りたとの事であった。

今、自分が人の子の親となって、戦争中の学校生活を振り返ってみると、先生方は、大勢の生徒を、何時如何なる事態になるかわからない状況の下で預かり、指導教育するという、この時代ならではの大変な御苦勞をしていて下さった



花小金井にあった学校農場での脱穀作業

と思う。

ミッション・スクールというだけで文部省から特別扱いされ、戦争反対の御気持ちでも立場上、口にお出しになれなかったろう。

学校農場での作業

長野先生は、学校内は勿論、農場でも黙々と精一杯身をもって見本をお示しになるので敬服するばかりだった。化学の佐藤勇先生とよいコンビで、農場では頼もしいお父さんとお兄さんのようで、教室から解放された生徒達もリラックスして、冗談を云ったりしながらの農作業が楽しく、春休み、夏休みに自由参加で行く時も、姉と参加しては好く働いた。

学校農場は、西武線の花小金井駅から十分程の農村地帯にあった。真夏の除草で讚美歌の「ひたいを落つる玉の汗化してたりほの実となりぬ」を実感したり、冬休みの作業で、後手を組み十糎程に伸びた麦の上を、ゆっくり踏みながら植物の生長の不思議さを感じたりもした。鍬や鎌の使い方、シャベル移植ごてなどの土落とし等、その後の生活にも役立つ事や暑さの中、長袖で頸に手拭いを巻き、のぎに刺されながら行う脱穀などのような、今迄知らなかった農家の人達の苦勞を知る事が出来たのも、食糧、物資の少なくなった時期にあった好い経験をさせて頂いたと感謝している。

凸版印刷での勤勞奉仕

三年の三学期と四年の夏頃に、本所厩橋の凸版印刷工場に勤勞奉仕に行った。そこでは満州国で使用する軍票の印刷の検査と、裁断のための紙揃え、恩賜の煙草、勲章、防毒マスクの紙箱の組立てが主たる仕事だった。

お札の検査は二工程あって、一枚の紙(約30×40糎の大きさ)に二列に五枚ずつ印刷され、それを百枚ずつ重ねて机上に置き、ストロー状に巻いた紙の棒でお札を撫でながら印刷のミスを見付けるのだが、始めは慣れないので遅いが、じきにサッと目を通すだけで見られるようになった。工員さんがその大きな紙を両手で持上げては机の上に落すようにしながら揃え、目にも留まらぬ早さで数えるのを珍しいものを見るよう

に眺めた。次の工程は机をはさんで二人ずつが一組で向かい合って坐り、十枚綴りのお札と同型の金属板の両端に針が1本ずつ立っているものに、お札に付いている合印を見ながら二人で同時に差して裁断台にまわす仕事だった。仕事としてはやさしいが、単調なので眠くなって困ったが席を立ててその場で体操をしたりおしゃべりをしたり「もぼおぼじびきおぼひびるぶねべ」などと1字ごとにパピブベゴを入れて人に話の内容が分らないように話すなどして面白がっていた。ハワイ帰りで別科から移った山本道子さんが、ハワイアンのメロディを鼻唄でうたうと、楽しい歌に飢えていた皆は大よろこびで、工員さんも、もっとほかの歌もうたって聞かせてと大層な人気だった。

煙草や勲章の箱作りも糊付けにコツがあり、防毒マスクの箱は筒型なので、作業はかなりむずかしかつたようだ。



戦時下学徒勤労挺身隊の腕章 沖電気

勤労動員 学校工場での作業

五年生になり沖電気株式会社の学校工場として働く事になり、無線受信・送信機の組立て、コイル巻き、マイカ切りなどの作業にあたった。作業所は作業に使う机に各人一個宛のソケットが必要だったからか、何時でも授業に戻れるようにとの学校側の配慮からか、特別教室（地歴・理科・図工）があたり、朝は屋上でラジオ体操・軍人に賜りたる勅語を唱えた後、分隊にわかれて教室に入って作業を開始、先生はあまり作業所にはいらっしやらなかった。工場から派遣された工員さん、女工さんが手を取って指導してくれた。

受信・送信機は23×16^{センチ}纏角、高さ15纏のアルミニウム^{センチ}の枠に、大小の穴をあけた棚のついた物で数個のコイル、コンデンサー、抵抗機などをねじ止めし、配線、ハンダ付けをして仕上げる。ハンダ付けは端子をやすりでこすって銅の地金を出し、赤・緑・黄・黒などのチューブ線やエナメル線の表皮をはがして、ハンダ用ペーストをつけ、電気ゴテで棒状のハンダを溶かして端子と電線をすっぽりと覆うように盛り上げる。細かい所は配線図を見ながらピンセットで

押さえハンダ付けをするのだが、出来上がったあと、ピンセットで動かすとポロッと取れてしまうと「天ぶらだね」（衣まではがれる意）と工員さんに云われてしまう。ハンダゴテの先端も、やすりで好く磨いておかないと、うまくハンダがついてこないし、又いつまでも同じ所をいじっていると、ハンダが流れたり傍のチューブ線を焦がして、又全部やり直しをしなければならなくなる。

科学する心

電気の知識もろくにない女学生がにわか女工になったのだから、いろいろおかしい事もあった。当時「科学する心」という言葉が流行ったが、科学する心で、ピンセットの先を広げてソケットに差込んだ科学者は、パツ!!という音と共にヒューズがとんで教室中を停電させ、ピンセットもひしゃげて使いものにならなくなった。又別の科学者は、ハンダの棒を折り曲げているうちに、やはりソケットに差し込み、同じようにショートさせたらうしろ白い煙が立ち、ものすごいにおいが出ることを証明、体験したのだった。

作業服はカーキ色のスフ、瀬戸物のボタン、履物は鯨や鮫の皮の靴なども形にさえなっていればそれでよしとしなければならなかった。そのほか、何でも不足がちで不自由だったが、日本中皆同じと思うからか余り苦にはならなかった。それどころか、そんな中から何かを生み出し、たのしむ心を持っていた。仕事のない時には色付きのチューブ線や針金ハンダなどで鉄かぶとの穴に差込むための校章や自分のイニシャル、ブローチまがいのものを作った。私は絹糸被覆の太いエナメル線のコイル巻きをしていたが、切りくずや不良品を集めて丁寧に伸ばしエナメルをはがした銅線で、御正月用に餅焼網を作ったが、そのうす赤い銅線がきれいなので勿体なくて使う気になれず、リボンでつるして部屋飾りにした。

視察

十九年の夏過ぎだったと思うが、軍部から、学校工場視察に来る事になったが材料の補給がなくて仕事が出来ない。思えばその頃からすでに資材が不足していたのだろう。工場関係者は、前日完成した製品を一度分解して、組立て作業をしているふりをして見せるよう提案したが、先生方は、折角生徒が精根込めて出来上がらせ



正面玄関
沖電気株式会社東洋永和作業所の表札がかかっている

たものを解体させるに忍びないと反対されたが、結局は工場側の強い要請に従わないわけにはいかなかった。

お弁当温めと昼休み

学校内の暖房用ラジエーターは弾丸になる。お国の為だ、と外して供出したので、冬の朝は、まずハンダごてを暖めてそれに手をかざして暖をとる時もあった。皆、ハンダごての下に敷く石綿板の代りにお弁当箱を置いてあたためたが、好いにおいにつられて、ふたを開けてみたり多くのせて置いて、おこげが出来たりもした。

学校工場の昼休みは体育館でバスケット、庭でバレーボールやソフトボール、散歩、中庭で静かに語り合ったり、讃美歌や外国民謡を歌うグループなどさまざまだったが、学校で作業をしていたお陰でその時間をたのしく過ごす事が出来て幸せだったと思う。そんな時私がノートを破いて、右上に【かえで新聞】と書き3段に割って戦局や学校内クラスでのニュース配給の予告など書いて回覧すると面白がられた。

授業・配給

学校工場の時期でも勉強が遅れないようにと授業時間をとって下さる先生に「私達が今しなければならない事は、国が戦争に勝つためのこの作業です」などとなまいきな口をきいていた。「語学を修める事は敵を知ることだ」と、特別に昼休みに英語のクラスを開いて下さった光明先生がモーパッサンの「くびかざり」などを講義して下さった事をなつかしく思い出す。時には沖電気 회사から配給が来た。アイスクリーム・西瓜糖・うずら豆の甘煮・ほしバナナ・米などだったが、米は学校に一まとめで渡され生徒が持って来る布袋に、出席日数により、まぢまぢの分量の米を量り入れるので先生方は大変御苦労なさったという。



下山田さんの直筆
絵入り手記(コピー)

或時、芝浦の沖電気工場まで、さつまいもの配給を取りに行った事があった。鳥居坂のごつごつした敷石の坂道を、長野先生を先頭に、有志五、六人が、大八車をガラガラ曳いて降った。

会社は白い建物で、迷彩の黒い塗料がところどころに塗ってあった。帰り道も先生が何か面白い話でもして下さったのか、笑い乍ら、結構たのしく遠い道程を芋俵を積んだ大八車を引いたり、押ししたりして帰って来た事を覚えている。

又、或る時、足りない部品を受取りに、赤坂の待合の検番に行った級友は、階段の多い建物の、そこ・ここの部屋で芸者さんがモンペ姿で私達と同じ作業をしていたと話していた。指導の工員さんは、みな学校工場より赤坂の作業所に行きたがっていたようだ。

報償金

勤労働員といっても、報償金が支払われ、私の手許に残っている通年勤員報償金という月給袋には三十四・〇〇とか十二・〇二などの金額が記載されている。謄写版で刷った月給袋の内側は奨学金の領収証だった。私は生れて始めて給料を手にしたが、^{ちぎ}香には品物がもう余りなかった。六本木を溜池の方に降りる市見坂の下に薬局がありその頃には珍しい横文字看板でHi! Pharmacyと出ていて、その店にコティのお白粉が特別に入荷しているとクラスのだれかに教えられて、母の為にそれを買ひ、自分のためには誠志堂^(注)で散々迷ってポッテチエリーの画集を買った思い出がある。

(昭和20年卒 旧姓：有島)

注：六本木交差点にあった書店

この原稿は、創立百周年を前に、百周年準備室および東光会が募集した「女学科の記録」に応じて自主的に書かれた長文のうちの前半部分を一部省略・編集したものです。原文は『百年史』編纂に際し参考資料として使用されましたが、同学年の方々以外には公表されることがありませんでした。その後30年近くが過ぎ、もはやこのような記録が新たに書かれることは難しいため、ここに紹介いたしました。
続きは次号をお楽しみに。(编者)

資料紹介 18

「東洋英和女学校 勤労働員関係文書」 1

水谷 悟

目録化の意義

東洋英和女学院は、創立126年の歴史と伝統を持つ学舎である。幸いにも戦災を免れたことに加え、卒業生有志からの寄贈・寄託もあり、開学以来の貴重な史料やカナダ婦人宣教師たちの写真などが保存されている。その史料群の目録を採って整理しデータを集めて管理することは、これまでの学院の歴史を確かめつつこれからの歩みを考えていく上で、その根幹をなす仕事の一つと言える。しかし、史料室の置かれている現状は厳しく、肝心の目録化・データベース化の作業も進んでいない。

そこで、今回は、「勤労働員関係文書」として保存されてきた史料群を調査・整理し、その概要を「目録」という形で提示することで、今後の史料室の進むべき方向性を示したい。

「勤労働員関係文書」目録化の手順

ここに収録した「勤労働員関係文書」は、本校史料室（本部棟B2F）の書庫において保存されてきた史料群である。現状では、史料室職員の手により、二つの箱に分けられ、それぞれの箱には「勤労働員日誌 戦争中教務日誌 他」と「昭和14年度、16年～19年12月まで 勤労働作業に関する書類綴」というラベルが貼られている。今回の目録作成では、史料保存の現状を維持する立場に基づき、箱詰めされた史料を上から順に並べ、番号を付していくこととした。その作業に当たり、史料カードを作成し、「整理番号」「標題」「作成者」「年代（始）（終）」「形態」「数量」「備考」の欄を設け、1点ずつ記録・整理した。続けて、それら記入済みのカードをもとに、パソコンに入力する作業を開始し、随



時、記載事項の修正などを行った。

「教員会議記録」・「教務日誌」・「勤労働員日誌」などの意味すること（予告）

総点数は54点。史料の対象年代は、昭和12年から同31年に至る、およそ19年間にわたっている。なかでも昭和14年から同20年までの時期に記された「教員会議記録」・「教務日誌」・「勤労働員日誌」などがその中心を占めている【写真参照】。この史料群は、まさに日本がアジア・太平洋戦争へと突き進んでいく道程とともにあり、キリスト教の信仰に拠って立つ東洋英和女学校が、時代の荒波のただなかでいかに身を処していたかということを物語っている。そして裏を返せば、そこには、当時の国家や社会が、私立の女子教育機関に担わせようとしていた社会的役割が映し出されていると言える。紙幅に限りもあるので、その具体的な内容については、次回の「史料室だより」にて、いくつかの史料を取り上げて詳しくご紹介することとしたい。

（中上部社会科教諭・史料室委員）

番号	整理	標題	作成者	年代	形態	数量	備考
1	1-1-1	昭和十九年度教科書配当表	東洋永和女学校	昭和19	状	1	活版
2	1-2-1	「戦争中の記録（防空・防護団）」	東洋英和女学院		袋	1	中に「1-2-2～1-2-10・8」あり
3	1-2-2	昭和十九年七月現在 裁縫科備品控	責任者 柴田順 / 森田節子	昭和19.7	綴	1	
4	1-2-3	東洋永和女学校国民貯蓄組合規約	東洋永和女学校国民貯蓄組合	昭和16.9	状	1	
5	1-2-4	東洋英和女学校特設防護団規定			綴	1	1-2-3～1-2-6がクリップ止め
6	1-2-5	昭和十七年度 特設防護団役員編成	東洋永和女学校	昭和17	状	1	「東洋永和女学校」の罫紙(赤)
7	1-2-6	教職員一覧 (34名)			状	1	手書きのメモ
8	1-2-7	昭和十八年度 特設防護団役員編成	東洋永和女学校	昭和18	状	1	「東洋永和女学校」の罫紙(赤)
9	1-2-8	東洋永和女学校 特設防護団配置表	東洋永和女学校	昭和18	状	1	「東洋永和女学校」の罫紙(赤)

10	1-2-9	東洋永和女学校 報団編成表	東洋永和女学校		状	1	「東洋永和女学校」の部紙(青)
11	1-2-10	参考ノタメ残置				1	昭和二十七年四月十一日長野院長より御あづかりしたのもの
12	1-2-10-1	防空強化促進訓練			状	1	
13	1-2-10-2	東洋永和女学校 昭和十六年度 防空実施計画	東洋永和女学校	昭和16	綴	1	
14	1-2-10-3	受持通知表(官公署等専用)	東洋英和女学院 中学部高等部	昭和31.7	状	1	警察署に届け出る
15	1-2-10-4	受持通知表(官公署、銀行、会社専用)	東洋英和女学院 小学部中学部高等部	昭和28.10			1
16	1-2-10-5	受持通知表(官公署、銀行、会社専用)	東洋英和女学院 小学部中学部高等部	昭和28.10			2
17	1-2-10-6	受持通知表(官公署、銀行、会社専用)	東洋英和女学院	昭和28.1.29	状	1	
18	1-2-10-7	受持通知表(官公署、銀行、会社専用)	学校法人東洋英和女学院 中学部高等部	昭和28.1.25	状	1	1
19	1-2-10-8	受持通知表(官公署、銀行、会社専用)	学校法人東洋英和女学院 中学部高等部		状	1	2
20	1-3-1	「戦争中 教務日誌」			袋	1	袋の裏に記載...中に「1-3-2-1-3-6」あり
21	1-3-2	教務日誌(七月二十五日(火)~八月二日(木)) 【18~25頁】		昭和 .7.25~8.2	状	6	
22	1-3-3	教務日誌(十二月一日(金)~十二月三十一日(日))		昭和 .12.1~12.31	綴	1	1-3-1~1-3-5 「東洋永和女学校 報告団用紙」
23	1-3-4	教務日誌(二月一日(木)~二月二十八日(水))		昭和 .2.1~2.28	綴	1	
24	1-3-5	教務日誌(三月一日(木)~三月二十五日(日))		昭和 .3.1~3.25	綴	1	
25	1-3-6	教務日誌(二月一日(木)~二月二十八日(水))		昭和19.12.10 ~ 昭和20.2.13	綴	1	
26	1-4-1	昭和十四年五月一日購入 ビヤノ保証書在中			袋	1	中に「1-4-2~1-4-3」あり
27	1-4-2	保証書(ショウエンパルグ型ピアノ二台)	合資会社東京ピアノ商会	昭和14.5.1	状	1	
28	1-4-3	借用書(ピアノ1台)	安藤電気株式会社	昭和19.7.4	状	1	
29	1-5-1	東洋永和高等女学校(封筒)	東洋永和高等女学校		袋	1	袋のみ
30	1-6-1	八月 勤労動員日誌	東洋永和女学校	昭和 .8.1~8.31	綴	1	8月1日(火)
31	1-7-1	九月 勤労動員日誌	東洋永和女学校	昭和 .9.1~9.30	綴	1	9月1日(金)
32	1-8-1	昭和十九年七月一日 勤労動員日誌	東洋永和女学校	昭和19.7.1~7.31	綴	1	7月1日(土)
33	1-9-1	一月 勤労動員日誌	東洋永和女学校	昭和 .1.3~2.1	綴	1	1月3日(水)
34	1-10-1	支那事变「前線之活躍 銃後之後援」絵葉書	海軍省恤兵係	昭和12.10	袋	1	
35	1-10-2	絵葉書「航行中ノ我艦隊」	海軍省恤兵係	昭和12.10	状	1	
36	1-10-3	絵葉書「海軍航空隊」	海軍省恤兵係	昭和12.10	状	1	
37	1-10-4	絵葉書「海軍陸戦隊」	海軍省恤兵係	昭和12.10	状	1	
38	1-10-5	絵葉書「千人針」	海軍省恤兵係	昭和12.10	状	1	
39	1-11-1	出席簿			綴	1	未使用
40	1-12-1	作業状況記録用紙(昭和二十年二月)		昭和20.2.13	状	1	
41	1-12-2	作業状況記録用紙(昭和二十年二月)		昭和20.2.14	状	1	
42	1-12-3	作業状況記録用紙(昭和二十年三月)		昭和20.3.3	状	1	
43	1-12-4	作業状況記録用紙(昭和二十年三月)		昭和20.3.4	状	1	
44	1-12-5	營養状態ヲ「要注意」ト診定スル規準			状	2	
45	2-1-1	昭和十九年七月一日以降 沖電気株式会社 東洋永和作業所日誌	東洋永和女学校		袋	1	
46	2-1-2	昭和十九年七月一日以降 沖電気株式会社 東洋永和作業所日誌	東洋永和女学校	昭和19.7.1 ~ 昭和20.5.26	冊	1	
47	2-2-1	昭和十四年度 昭和十六年度以降十九年十二月まで 勤労作業に関する書類綴	東洋英和女学校	昭和14.4.12 ~ 昭和19.6.21	綴	1	各種の要綱や趣意書・計画書を含み
48	2-3-1	昭和十九年四月より二十年十月まで 勤労動員二開スル綴	東洋永和高等女学校	昭和19.4.7 ~ 昭和20.10.19	綴	1	各種の要綱や趣意書・計画書を含み
49	2-4-1	昭和十九年四月以降 教員会議記録		昭和19.4.4 ~ 昭和20.3.6	冊	1	
50	2-5-1	昭和二十年三月六日以降 教員会議記録		昭和20.3.6 ~ 昭和21.2.6	冊	1	途中に空きあり
51	2-5-2	昭和二十年三月六日以降 教員会議記録(コピー)					
52	2-6-1	昭和二十一年二月十三日以後 教員会議記録簿		昭和21.2.13~9.25	冊	1	
53	2-7-1	昭和十六年より昭和二十年まで 恤兵品、報告団、報告貯蓄 他		昭和16.5.8 ~ 昭和20.4.13	綴	1	昭和十六年度 恤兵品に関する書類綴 昭和十七年四月~昭和十九年五月 学校報団保導部に関する綴 昭和十六年四月~昭和二十年四月 報団貯蓄に関する綴 昭和十七年度以降 配給二開スル書類綴
54	2-8-1	昭和十九・二十年度 諸通牒綴	東洋永和高等女学校	昭和19.4.18 ~ 昭和21.4.9	綴	1	

梅澤雄一先生の思い出

佐々木 喜久

梅澤先生との小学部での出会いは今から25年前になります。大学を卒業し、小学校の面接試験を受けた中でこの東洋英和女学院にお世話になることに決めました。この時、時を同じくして梅澤先生も小学部長になられました。不思議なご縁で、実は梅澤先生とは、教会がご一緒に、私がまだ小さい時から教会学校で先生をされていました。ですから就職をする前からよく存じ上げておりました。とてもやさしく親身になって人の話を聞いてくださる先生でした。

小学部にお世話になることを決める面接試験は梅澤先生の前部長松本寛二先生でしたので、梅澤先生と同じ職場になることは全く知りませんでした。新学期が始まる前の皆さんとの顔合わせの時はとても驚きました。今まで教会学校の先生だった梅澤先生が、小学部の部長先生になられたのですから。職場で先生にお会いし、教会でもまたお会いするという事になったのです。

公立の養護学校で校長先生を15年以上されていた梅澤先生ですが、まず東洋英和に着任された時のことで印象に残っている一言があります。それは、「職場の机の上にいつも聖書をのせておけるのでとてもうれしい」という言葉でした。公立の宗教色を入れることを許されない職場から、神さまと共に歩むことのできるこの職場は、とても素晴らしいことであり、うれしいことであるといつもおっしゃっていたのをよく覚えています。

職場では先生方の意見をよく聞いてくださり、どんなことにも必ず丁寧にお答えくださる先生でした。運動会や学会会では前の席に座られて一つひとつの演技をご覧になり、演技ごと、クラスごとにその良いところをメモし、必ず最後の講評で具体的に子どもたちに返してくださいました。子どもたちも、先生の言葉に励まされたことが沢山あったことと思います。また、教師に対しても細かいところまで目を配り、メッセージを机の上においてくださることもありました。時折、ご自分のお書きになったメモの文



梅澤雄一先生

字が読めなくて、聞きにこられることもありました。確かにとても読み辛い文字でした。ただ、職場の人たちを大切に、何よりも子どもを大切に思い、いつも子どもたちに寄り添う姿がとても印象的な先生でした。校長先生としての長い経験があるために、どんな時にも落ち着いてしっかりと対応して下さり、安心することもできました。感謝しています。

今でもきっと、神さまのもとで先生をされているのではないかと考えています。

(小学部教諭)

梅澤 雄一先生略歴

(うめざわゆういち)

- 1926年 2月11日 東京に生まれる
- 1945年 東京第二師範学校卒業
- 1946年 小学校教諭となる
- 1955年 東京学芸大学附属中学校教諭となる
(担当:国語・社会)
- 1960年 同 養護学校教諭となる
- 1971年 都立養護学校校長就任 (~1987年)
- 1987年 東洋英和女学院小学部部長就任
(~1992年)
- 2001年 7月26日逝去 (享年75歳)


- * DVD 3枚 「ToyoEiwa Jogakuin The 23rd Christmas Concert」(中高部)、2009「むかえようクリスマス」画像(小学部)、「2008年高2修学旅行in広島・天草・長崎」
- * 125周年記念下敷き
- * 小学部 卒業文集や学年文集19冊、「小羊」No.14(創立七十周年・新校舎落成記念)、「神の恵をうけて 創立百周年記念」小学部母の会
- * 「敬和会」36～61号のファイル(案内状など含む)
- * 卒業アルバム 1937年、同窓會会報6冊、校友会誌2冊、「楓」第6號、『東洋英和女学校五十年史』、『百年史』、パンフレット多数ほか
- * 「東洋英和女学院大学20年の歩み1989-2009」
- * “Crossing Worlds -The Story of the Woman's Missionary Society of the United Church of Canada” Donna Sinclair著 The United Church Publishing House
- * “They Touched My Heart” Seiichi Ariga
- * 「日本伝道150年記念行事報告集 神の恵みの年」日本キリスト教団日本伝道150年記念行事準備委員会(中高部ハンドベル部の演奏写真所収)
- * 『大正期の家族問題 自由と抑圧に生きた人びと』湯沢雅彦(元本学教授)著 ミネルヴァ書房(柳原白蓮事件関連考察あり)
- * 「大正・昭和・平成の時代を生きた池田道子」(池田道子(1934年高女科卒)追悼集)
- * 『朝河貫一論 その学問形成と実践』山内晴子(1962年高卒)著
- * 『アーカイヴへのアクセス 日本の経験、アメリカの経験』小川千代子、小出いずみ(1969年高卒)編 日外アソシエーツ
- * 「海外日本研究者の画像利用事情 東京シンポジウムの記録」安江明夫、小出いずみ(1969年高卒)編 北米日本研究資料調整協議会編
- * 川崎富作氏著作、関係資料
- * 『戦争と明治大学 明治大学の学徒出陣・学徒勤労動員』明治大学
- * 「東日本におけるメソジスト宣教の足跡」啓明学院高等学校共学部第二期生男子有志著
- * 「女性宣教師「校長」時代の同志社女学校」上巻 坂本清音編著 同志社女子大学
- * 「国文研究」第55号 熊本県立大学(〈資料紹介〉東洋英和女学院所蔵「徳富愛子」関連資料 所収)
- その他 他大学年史紀要 多数

主な移管資料

- * アルバム2冊 小学部校舎お別れと解体工事、新校舎建築記録写真 小学部より
- * アルバム17冊(1997年度～1999年度) 東洋英和幼稚園より
- * 「父・倉長巍の手記」 中高部図書室より

購入資料

- * 写真 3枚 「軽井沢ユニオンチャーチ記念集会」「軽井沢開発50年祭記念パレード」「ノルマン師追悼記念集会」
- * 『アーカイブズ情報の共有化に向けて』国文学研究資料館編 岩田書院
- * 『劣化する戦後写真 写真の資料化と保存活用』全国歴史資料保存利用機関連絡協議会編 岩田書院
- * 『失われた近代建築 文化施設編』増田彰久写真・藤森照信 文 講談社
- * 『母への賛歌—日本軍抑留所を生き延びた家族の物語』ヘール, H.V.R著 タンゲナ鈴木由香里(1970年高卒)訳 いのちのことば社
- * 『茶道を深める—茶道心講』岡本浩一著(本学教授) 淡交社
- * 『日本のお金持ち妻研究』森剛志、小林淑恵(1999年大卒)著 東洋経済新報社

 <p>東洋英和女学院史料室 利用案内</p> 	<p style="text-align: center;">お知らせ</p> <p>史料室利用案内を作成しました。目録化もおぼつかない現状ですが、皆様のご協力を仰ぎながら整備していきたいと願っています。</p> <p>史料室では、学院の歴史や学校生活を物語る資料を収集しています。ご家庭にあってご不要のものがあれば、ご寄贈いただけると幸いです。</p> <p>お問い合わせ先は下記の通りです。</p> <p style="text-align: center;">東洋英和女学院史料室(法人事務局内) 03-3583-3166(直) FAX 03-3583-3329(直) E-mail:archive@toyoeiwa.ac.jp</p>
--	---